

再び論語

澤田雅弘

Masahiro Sawada

読書の間にノートに控えた字句のほとんどは、当初の感銘が色あせていくが、論語だけは例外であると、前号に記した。

今度も締め切りに追われて書く始末になり、書きためたノートを頼りに、引き出した字句は、やはり論語だった。学生たちの書展用だということも作用したのかもしれない。

そのひとつ「不患人之不知，患不知人也。」（学而）は、三十年ほど前にノートしたもので、当該頁には、鉛筆でいろいろと布字を試した落書きが幾枚も挟んであった。幾度も気に留めながら、先に延ばしてきたものだ。

はじめは正方形の紙に二十枚ほど書いたが、ふと、横長にしてみたくなった。変更してから十枚ほど枚書いたものの一枚である。筆は、大学生のころに何十本と買った上海工芸の蘭蕊羊毫。二十年ほどは手にしなかったと思う。これという理由もなく筆筒から抜いて使った。往年にはずいぶん愛用していただけに、その筆触には懐かしさが

あった。何枚か書くうちに筆画はしだいに細まっていったが、それでいいと思った。

も一つの「知其所亡」（子張）は、「子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。」からとった。昨年にノートしたばかりの字句で、「日知其所亡」を鉛筆で一二度布置してから、試しに半折三分の程度の紙に数枚書いた。そして磨墨する間に、ふと「日」が無い方が、ことばとしての広がりが出るように思われ、「日」を除くことにし、紙型を変更して書いた。

当初、筆はこれも大昔に買った蒼海（善璉湖筆）の大で書いたが、紙を小さくした方がいいように思われて、結局これも蘭蕊羊毫を持ち替えた。

墨はどちらも、例によって「抱雲」。磨墨液と固形墨を混用した。この日、もう一点、蘭蕊羊毫で書いた。筆を執れる日はこの一日しかなかったが、不思議と気持ちに焦りはなかった。



34.5×8.5cm

不患人之不知、
患不知人也。



知其所亡

17.3×17.3cm